

水害を受けても集落を維持し白川、北上川狭さく部草ヶ沢・小間木・日形など、江川、多摩川狛江（昭49・9・1）

水害壊滅、移転——最上川毒沢、北上川狭さく部狐禪寺・舞川・川崎・谷起・中里・下曲田など、由良川桑飼下など、四万十川大井野

天井川ベリ微高地——草津川ベリ、西宮市仁川

◎自然堤防上のどこを集落に選んだか

山脚寄り、上流側よりは下流側、河岸よりは後背湿地側、ただしできるだけ砂地

以上のことは時代別に考察する必要がある。またとくに食糧（水田）との関係も大切である。

所見

従来の教科書的な認識では、沖積平野における集落は、古くから自然堤防上に定着することが多いとされてきた。発表者は、一応これを肯定しながらも、自然堤防集落の立地に対してマイナス面の作用を果たす水害に関して分析を試み、発表要旨にみられるように、自然堤防集落を、水害との結びつきに着目して五つに分類された。第一から第五に至るまで、順次、マイナス面が強く現れた事例があげられている。第一の旧自然堤防上の集落は、安全度は最高だが、農業および飲料水の面で難点があり、第二にあげられた事例が、従来の教科書的な認識の対象となつたものである。河川の上流にさかのぼるにしたがつて、第三、第四の分類にみられるように危険度が増し、最も危険度の高い第五の事例として、逆流地域をあげている。発表者は、さらに水害後の集落の定着状況に着目して、それらを類別された。

筆者は、現在、埼玉平野上流部にあたる首都圏の都市成長前線帯において、商業地域の形成を問題にしているが（城西経済学会誌

一〇、一八一―一九七四、四六―七二、地理一九、六八一―一九七四、一一八―一二四、同一九、九八一―一九七四、九八―一〇四、関東都市学会年報二八一―一九七五、未刊）、越辺川・高麗川などの自然堤防集落から坂戸町へ転居して店舗を形成した事例が比較的多く、しかも、河川の洪水に基づいて転居したものがみられる。これは発表者の第三の分類に属するものと判断され、発表者の今回の論旨と軌を一にしている。いいかえれば、近・現代における沖積平野の集落立地は、それ以前の立地を継承して自然堤防上にみられたが、発表者の五つの分類にしたがつて、立地の継承または、立地移動をみたと解し得よう。

菊池利夫は、水害を受けても集落立地が継承される事例が多いことについて、その要因をどう把握すべきかという問題を提起したが、発表者は、私有財産制が大きく影響するという見解を示し、伊藤重信は、生活の基盤が確立されている以上、容易に立地移動できないという長島における自らの経験的事実を主張した。都市域内の水害常習地域としてのダウンタウン（下水道及び排水施設の不備な地域）においても、居住者の定着性は強いのであって、生活空間への執着は、私見によれば、人類の生態的な側面を反映する社会経済的な「土地への刻印」とみられる。（田村正夫）

書評

大越勝秋著 官座

昨一九七四年度の本学会員の著しい業績のなかに大越勝秋博士の

の「宮座」がある。同君は終戦後いち早く宮座の研究にとりくまれてきた。そしてその論文は、大阪南部の堺市をはじめ旧和泉地域における実証的研究を中心として、紹介者の短見をもつても五〇余篇を数えている。その掲載誌も多岐にわたり、はじめは歴史と民俗学の分野が主であつたが（地方史研究、近畿民俗、日本民俗学、民間伝承、社会と伝承など）、一九六〇年代以後はそれらのほかに、人文地理・新地理・地域研究・教育地理などの地理学関係の諸誌のほか、本学会の歴史地理学紀要にも論説がのせられている（ほかに南海・狭野・大阪府教育委員会研究報告など、広い分野にわたる）。これらのことをもつても、著者がここ四分の一世紀にわたつて宮座の研究にいかに熱情を投入していたかを知り得るのである。

この「宮座」は著者の宮座研究の集大成版といふべきもので、戦前の肥後和男博士の「宮座の研究」に次ぐ大著といえよう。本書は七章より成つている。第一章は序説、第二、三章は本論（第二章村落と宮座、第三章同族座、第四章寺座とその類型、第五章入会山と山郷、第六章宮郷）、第七章は結論である。ほかに和泉地方の宮座の一覧表・地名・事項両索引がそえられている。

いま本書につき特記すべき諸業績のうち二、三を紹介することにする。まず指摘したいのは、本書には出されていないが、著者が本書を編まれる前に、研究地域としてとられた上記和泉地方五市の宮座史料集を完成されたことである。こうしたオーソドックスな方法の必要性は、研究にたずさわる者の誰もが心することであるが、至難なことであるため、あえてそれをなさないままに研究に突入してしまふ弊におちいるのである。しかし著者は、本研究の初期にお

いてあえてそれを敢行され、然るのちに研究に入る方法をとられたのであつた。そして宮座・寺座の名称、分布、宮座の慣行状態、宮座の伝承と宮座文書を集録・刊行されたのである。

実地研究にあつては、宮座の性格上、文書に表現されているものは一部分に過ぎなく、その実態把握は口伝くでんを詳細に記録するほか、社寺の諸行事ごとと立会つてその実施状況を観察することなしでは、到達し得ないのである。このため著者は史料解釈にあわせて民俗学の研究方法をもとり入れて、精密な認識への到達をはかつたのである。したがつて本書にはいたるところに、こうした入念精細な研究法によつてはじめて得られる貴重な成果にみちているといつてもよいのである。

本書によつて実証解明された新事実や意義は少なくない。それらの中で大きくとりあげるべきものとしては、宮座の地縁性（地域性）・血縁性・封鎖性、宗教的色彩の残存などがある。例えば、地縁性については、宮座と農業水利との結びつきの大きいこと、すなわち農業水利と米の作柄の豊凶といった農業生産（村落の生産の中心）を通じての地域的結合が中心をなしていること、宮座は一村落到一神社があり、そして一宮座が結成されているのが常態であり、村落住民の生産と生活の諸活動に結びつけられて発達するのが一般型である。しかしほかに同一村落内に同族（同一血縁・家系・氏性）とくに村内の貴姓）を中心とする宮座集団（同族座のあること（明治以後同族祖神の合祀後は、旧社殿や神像・掛軸を中心に継続）、また古代以後近代初頭にかけて普及していった神仏習合思想に裏づけられて「寺座」が発達していること、神社（郷村の惣社）の改築資金の拠出について入会

山の収入があてられていたこと、また二カ村以上にわたる入会山の場合には「山郷」が形成されていたこと（山郷は池郷などとともに近畿中部に多くみられる）、諸村落の宮座間には協同的關係とともに階層關係の如き二重構造がみられ、それにもなつて宮座の集合体―宮郷が指摘されている。さらにそれらによつて、村落間に協同體關係、また郷村制的階層關係が成立していることの貴重な論證もみられる。

こうして本書は宮座について、その分布とその成立事情を明確にし、それらの広域的結合・階層構造にも及び、さらにそれらの成立過程と地域との関連―生産・生活機能を基盤とした―をきわめた歴史地理的な総合研究といえるものであり、斯学界の前進に貴重な貢献をされたものとして、紹介者は高く評価するものである。

（A5版二八八頁、大明堂発行） （浅 香 幸 雄）

第七六回例会の報告

第七六回例会は去る五月三十一日（土）午後、日本大学第二高等学校女子部において開催され、左記の発表があつた。

- 。「近世における関東の関所と番所」 渡 辺 和 敏 君
- 。「ヨーロッパの歴史的都市の都心部の景観」 (スライド使用) 浅 香 幸 雄 君

近世における関東の関所と番所

渡 辺 和 敏

近来、交通史研究の立場では、近世の関所が如何なる機能を果していたのか、あるいは従来関所と考えられていたものが、実は関所ではなかつたのではないだろうか、というような議論が問題となっている。その中で、私は近世の関所の機能としての主要部分は政治的なものであるが、そのほかにも社会情勢に対応した、例えば軍事的なもの、治安警察的のもの、経済的のもの等々、それぞれの歴史的矛盾關係とか立地条件によつて、多面的に把握すべきであることを主張してきた。

本日の発表も、このような私の問題意識に基づくものである。具体的には、(A)近世初期の関ヶ原の役・大坂の役の関所設置、(B)江戸市内に辻番所が設置される以前の各辻ごとに設置された関所、(C)大名統制を主幹とした五街道と主要脇往還に設置された関所、(D)一定の流通経済の発展に基づいて開通した新道に設置された関所、(E)流通組織を領主的に把握するために設置された五分一運上番所、(F)幕末期の社会情勢に対応して設置された関門の例を追求する。

すなわちここでは、簡単に表現すれば(A)は軍事的、(B)は治安警察的、(E)は経済的、(F)はこれらを包括した社会的なものと言えるであろう。しかし、この中でも近世の関所の最も大きな存在価値を示すものは、長期間存続して組織的にも整備されていたという点で

「入鉄砲に出女」という言葉で代表される、参勤交代を補完する意味での勝れて政治的な(C)・(D)の関所であろう。ここで勝れて政治的と表現する理由は、この両者の関所がその社会的条件によつては軍事的にも、政治的にも変貌する性格を潜在的に有していたと考えるからである。

なお、ここで注目すべきことは、これら(A)―(F)が単にここで列举